

デーヴィー・アナスーヤー、神々の母

アミ・バンサルによる再話

インドにあるチットラクタの鮮緑色の森の奥深く、幾つもの滝がしぶきをあげ、轟々（ごうごう）と流れるマンダーキニー川に囲まれた場所に、尊敬されている賢人アトゥリと偉大なヨーギニーであるアナスーヤーは、彼らのアーシュラムを築いていました。それは地球上にある天空の住まいでした。鳥たちは、ブラフマニャーナ——ブラフマン、絶対なる者の知識——の秘密が授けられているのを聞くために近くの木々の大きな枝に集まりました。森は太古の賛歌の振動と原初の音の共鳴で脈動していました。

賢人アトゥリは、ヴェーダの伝統の創始者である7人の賢人、サブタリシの一人でした。『リグ・ヴェーダ』の予言者である彼は、才気あふれ、思いやりがあり、人類を向上させることに打ち込んでいました。

彼の妻、デーヴィー・アナスーヤーはタパスウィニーでした。彼女は禁欲主義と自己鍛錬の生活を送り、ヴェーダの英知の具現者でした。彼女の思考、言葉、行動は教典の自然な表現でした。彼女は人格と態度において、その名前の意味を反映していました。アナスーヤーとは「誰に対しても一切の羨望（せんぼう）、敵意、憎悪を抱かない」という意味です。彼女と一緒にいると、純粹で穏やかな湖のそばに座っているかのようにでした——彼女の面前にいる人が見たのは、ただ彼ら自身の大いなる自己の鮮明なビジョンのみでした。

賢人アトゥリとデーヴィー・アナスーヤーのアーシュラムは、インド全土でよく知られていました。彼らの生徒たちは責任感があり、思慮深く、出会ったすべての人や物を敬い、意識を持つこの青い惑星のことを心から案じる、思いやりある人間だと知られていました。農民からブラーミン、商人から皇帝まで、あらゆる人々が、自分の子どもをチットラクタへ行かせたがりました。そ

して8歳から10歳の子どもの母親たちは、デーヴィー・アナスーヤーが子どもたちに、自分たち自身と同様の愛と優しさを与えるであろうことを知っていました。

賢人アトゥリは、人類の幸福のために、何年にも渡って深い瞑想に没頭することが、何度もありました。従って、アーシュラムの教えと仕事の多くは、デーヴィー・アナスーヤーによって指示されました。アーシュラムに喜びと深い安らぎの感覚を吹き込んだのは、彼女の存在でした。彼女の気配りと愛はアーシュラムの生命力でした。生徒たちの世話をし、どんな来客にも食事を与え、木々に花を咲かせ、動物たちを優しく世話をすることを、彼女は確実に行いました。彼女の愛情を込めた世話を通して、賢人アトゥリの生徒たちは豊かに育ちました。彼らの身体は健康になり、マインドは安定し集中していました。彼らの絶対なる者の知識への熱望は、さらに強くなりました。彼女の母のような愛の力を通して、これらのブラフマチャーリン——ブラフマンの知識を獲得するための道にいる生徒たち——は、ヴェーダの霊妙な知識が内側に生じた時、それを受け入れる準備ができていました。

ある日、偉大な賢人がブラフマンについて瞑想していると、彼のマインドはプラーナーヤーマを通して心に集中し、完全に執着のない状態にあり、彼の内側から祈りが生まれました。「私が崇拝し、その保護を得てきた宇宙の至高なる神が喜ぶように。絶対なる者が人間の形を取り、私の子どもになることによって、私の人生を祝福してくださいように」

彼が目を開けると、妻のデーヴィー・アナスーヤーが見えました。彼女は彼のために果物と水を持ってちょうど部屋に入って来たところで、事情を察してほほ笑みをたたえて、彼を見つめていました。彼の内側から生まれた祈りは、至高なる神の母になる、という彼女の深い熱望でもありました。

賢人は、絶対なる者、すなわちブラフマンを彼らの子どもとして具現化させるためには、苦行をささげる必要があることを知っていました。彼はそのことについて、妻と話し合いました。「私は

アーシュラムの世話をし、あなたの苦行を助けるために祈りをささげます」と、デーヴィー・アナスーヤーは言いました。

デーヴィー・アナスーヤーの同意を得て、賢人アトゥリは禁欲生活をするために、ヴィンディヤチャラの起伏のある緑の山々を旅しました。壮大な崖の上で、大きくて堂々としたバニヤンの木陰の下で、賢人は東を向き、至高なる意識について瞑想し始めました。昇る太陽と沈む月を彼の目撃者として、来る日も来る日も賢人は片足だけで立ち、空気以外は何も食べずに瞑想しました。数カ月がたち、やがて何年もたちました。雨が降り、嵐が襲いました。低木やつる草が賢人の周りに繁りました。それでも、彼を動揺させるものは何もありませんでした。近くにいる動物たち——リスやシカなど——は、彼のすべての吸気と呼気が「オーム」と共鳴するのを聞いたものでした。

数十年が経過したある日、賢人アトゥリの存在から輝かしい光が現れ始めました。光は金色がかかった白色で、脈打っており、着実に大きく明るくなり、地平線に向かって広がりました。その途上にあるすべての植物、すべての生き物にまで輝きを放っていました。デーヴィー・アナスーヤーと賢人アトゥリの心の洞窟で抱いていた祈りは、この光を通して明確な形となったように見えました。しかし本当は、誰の祈りで、誰の願いだったのでしょうか？

ついに、賢人アトゥリの存在から発せられる光が、彼の心から飛び出し、天に届きました。

ハスの上に座り、四つのヴェーダを持つブラフマー神は、この光の矢が彼の住まいに入って来て、ハスの花びらをキラキラと輝かせると、顔を上げました。

クシーラ・サーガル、大いなる意識の乳白色の大海の別の場所で、水面が光で輝いているのに気づいた時、ヴィシュヌ神は、すべてのへビの王であるアナンタ・シェーシャ・ナーガにもた

れ掛かっていました。ヴィシュヌ神はよく見ようと、起き上がりました。見渡す限り、海全体がダイヤモンドで覆われているように見えました！

カイルス山の頂上で深い瞑想に没頭していたシヴァ神は、光の筋が雪をかぶったヒマラヤの峰々を、溶けた金のように見せているのを、第三の目で見ました。しかし、この光はどこから来ているのでしょうか。神は、この光は太陽からのものではないと、感じ取りました。

神々がこの黄金色の白い光を畏敬の念をもって注視すると、何かが彼らの心——まさに普遍的な心——をかき立てました。彼らそれぞれが絶対なる者の一つの側面であり、執着がなく平静であることは、まさに彼らの本質でした。しかし、その彼らでさえ、この光に引き寄せられずにはいられませんでした。それはとても純粋で、とても暖かいものでした。天やそこで見いだせる何かを超越した根源から、それは来ているように見えました。

ブラフマー神、ヴィシュヌ神、そしてシヴァ神は、大いなる意識の宇宙を超えてお互いを見合い、ほほ笑みました。これは彼らが待ち、願い、望んでいたことだったのです。

彼らは創造する者、維持する者、そしてすべての母親の強さでした。時を越えて、彼らは母親たちを見守り、祝福と恩恵を与え、母親たちの無私の祈りに応えてきました。しかし神々自身は母の愛を体験したことがありませんでした。心密かに、彼らはそれぞれ、この最も純粋で、甘美で、尽きることのない無条件の愛を知ることを強く望んでいました。なぜなら、その創造力と靈感から全世界を現した彼らでさえも、これほどの愛を十分に理解することができなかったからです。

ことのほか喜んで、三神は天空で集い、地上へ降りる準備をしました。言葉にならない彼らの切望は、デーヴィー・アナスーヤーと賢人アトゥリの祈りになりました。

太陽がヴィンディヤチャラに昇った時、この世界の3人の管理者が賢人アトゥリの前に現れました。

「おお、賢人の中の賢人よ」と、彼らは言いました。その声は賢人の心とヴィンディヤチャラ山の周りの谷でやさしく響きました。「どうか目を開けてください」

賢人はまぶたをぴくぴくさせながら開けました。彼の周りのすべてのものは光であふれていました。徐々に、神々のまばゆいばかりの姿が見えてきました。ブラフマー神が、汚れのない白い衣をまとい、数珠とカムンダラ——永劫の始まりにごとに、彼が宇宙全体をそれで創った因果の水が入った聖なる器——を持って、そこにいました。ヴィシュヌ神は、色合いは濃い青色で、首にヴァイジャンティの花輪を掛け、彼のスダルシャン・チャクラを昇る太陽の光でキラキラ輝かせて、そこにいました。そしてカルナーカラ、つまりシヴァ神はもつれた巻き毛をし、輝く三叉(さんさ)の矛を手に持ち、目からは慈しみがあふれて、そこにいました。

三神の輝きを見て、賢人アトゥリは何十年もの身体の疲れと凝りから解放されたように感じました。彼はひれ伏し、サーシュタング・プラナムをささげました。

「私たちはあなたの苦行と祈りをとても嬉しく思います」と、ブラフマー神は言い、神々は皆賢人にほほ笑み掛けました。

賢人の心はとても満たされたので、ほとんど話すことができませんでした。手を合わせて、彼はとうとう言いました。「あなた方のダルシャンを受けること、あなた方の栄光に満ちた姿を見ることは、私にとってこの上ない幸運です。私は本当に祝福されています」

「私たちはあなたの祈りに応えるためにここにいます」と、ヴィシュヌ神は言いました。

「アナスーヤー母さまに会いに行きましょう」とシヴァ神が言いました。

ヴィンディヤチャラ山は、三神がその上に立っていたので、とても祝福されていると感じ、チットラクタの森からアーシュラムへの歩きやすい道を作りました。森の木は花を咲かせることに決め、風の神、ヴァーユ・デーヴァターは柔らかく吹き、賢人アトゥリと神々の旅に森の花の香りを付けました。

デーヴィー・アナスーヤーは、神聖な内なる目で、三神が賢人アトゥリと一緒にアーシュラムに近づいてくるのを既に見ていました。彼女の目には涙が込み上げてきました。彼女の喜びに限りはありませんでした。彼女は、赤と白の柔らかな絹でできたお気に入りのサリーを着て、賓客を迎える準備をしました。

神々がアーシュラムに着くと、彼女は愛情を込めて彼らにあいさつしました。彼らの額にクムクムとティカというビャクダンのペーストを塗り、彼らの前でアーラティー・トレイを揺らしました。彼女が神々を新鮮なモーグラの花で作った花輪で飾ると、彼らはますますりしく輝いて見えました。彼女の瞳は愛と優しさと尊敬であふれていました。

デーヴィー・アナスーヤーがこのプージャをささげた後、神々は伝統的なしきたりに従い、右足からアーシュラムの敷居をまたぎました。アナスーヤーは神々にそれぞれ快適な席を勧め、水と新鮮な果物と乳で作った菓子やささげました。

三神はこのような丁寧な歓待を受け感動しました。ヴィシュヌ神はほほ笑みを止められませんでした！ 彼は立ち上がりアナスーヤーの手を取り、彼の隣に座るように頼みました。

デーヴィー・アナスーヤーが席に座ると、彼は「我々はあなたの祈りを受け入れました」と言いました。「実際、あなたの祈りは常に我々の願いでした。我々はあなたのような母の愛を体験したいと、いつも切望していたのです」

「我々は我々のエネルギーを一つにし、時が来たらアナスーヤー母さまの元に生まれるでしょう」と、シヴァ神は賢人アトゥリに言いました。「あなたとアナスーヤー母さまの息子の姿を取った我々の化身は、あまねく世界に奉仕し、世界を向上させるでしょう」

そして実際その通りになりました。数カ月後、12月の満月の日、三神を表す三つの頭を持った輝く赤ちゃんが賢人アトゥリとデーヴィー・アナスーヤーの間に生まれました。彼は「神々からの授かり物として与えられたアトゥリの息子」という意味のダッタートレーヤーと名付けられました。

デーヴィー・アナスーヤーと賢人アトゥリは彼らの息子としてダッタートレーヤーを授かった事に有頂天になりました。デーヴィー・アナスーヤーは彼のすべての要求に応えました。彼を風呂に入れ、服を着せ、賢人や聖人の話を聞かせました。彼の好きな食べ物——プーリ、キール、プランポーリなど——を作り、自分の手でそれらを与えました。彼を寝かしつけるために神聖な賛歌やチャンティングを歌い、赤ちゃんのダッタートレーヤーが目覚めるまでいつもその傍らにいました。

ダッタートレーヤーが成長すると、デーヴィー・アナスーヤーは世界のありようや教典の神髄、そして自然の神秘を彼に教えました。ダッタートレーヤー神は全知全能の存在でしたが、母の教えにうっとり聞き入りました。彼女の愛、彼女の思いやり、彼女の忍耐はとても素晴らしかったので、この少年となって具現化している神々さえ、天国とはいったいどんな感じだったか忘れてしまうくらいでした。

創造、維持、消滅という宇宙の三つの力の化身であるダッタートレーヤー神はやがてヨーギとなり、最初のアヴァドゥータ(物質的な世界から全く影響を受けない存在)となり、至高なるグルの原理の体現者となりました。彼が若い頃、彼はデーヴィー・アナスーヤーのアーシュラムを出て、大いなる自己実現への道を世界に示しました。グル・ダッタートレーヤーは世界に教典、『アヴァドゥータ・ギーター』やアシュターンガ・ヨーガの主要な教義を含む多くの教えを授けました。

偉大なる不死の存在であるチランジーヴィーとして、ダッタートレーヤー神は人類の向上のために、永遠にさまざまな姿を取って現れ、この惑星に存在し続けています。母の愛によって育てられ、デーヴィー・アナスーヤーと賢人アトゥリの祈りに応えて、ダッタートレーヤー神はその名前に忠実であったし、今もそうあり続けています。彼は全世界への贈り物なのです。

この物語は、『バーガヴァタ・プラーナ』を含む多くの教典で語られているダッタートレーヤー神の誕生の伝説から着想を得ています。

